

かかわりを深める生活科学習

—第1学年「学校探検でござ〜る」の実践を通して—

佐 和 真由美

1 はじめに

生活科では、具体的な活動や体験を通して、分かるようになったり、できるようになったりすることを大切にしている。この具体的な活動や体験のひとつとして、探検活動が挙げられる。探検活動では、子どもたちが未知のものや自分にとって不思議なものなどを発見する喜びを味わうことができ、次の活動への意欲を高めることが期待できる。また、子どもたちのどきどきわくわくする知的な好奇心をわきおこし、「いい匂いがしたよ」などと五感を使って対象に働きかける態度を育むこともできる。対象に働きかけるということは、「児童が一方的に身近な人々、社会及び自然に働きかけるだけではなく、同時に、それらが児童に働き返してくるといふ、双方向性のある活動が行われること」(小学校学習指導要領解説)である。つまり、子どもたちが、自由な探検活動で対象とかかわればかかわるほど、対象から何かを得て自分の活動や意欲を高めていくことになるのである。

そこで、学校探検を通して、子どもたちが最も身近な環境である学校に繰り返しかかわっていくことができる手立てを、次のように考えた。

- ・ 1年間を通して活動できる単元計画
- ・ 各自の活動がかかわり合う場の設定

本稿では、これらの手立てが、子どもたちと学校とのかかわりをどのように深め、活動への意欲を高めることになるのかを、子どもたちの姿から探っていきたい。

2 活動の実際

(1) 単元について

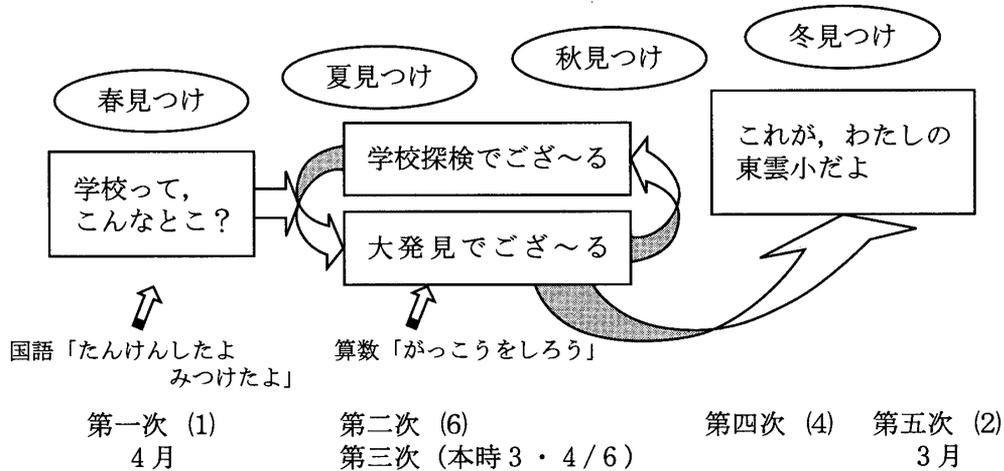
学校は、子どもたちにとって大切な生活の場である。子どもたちが、友達と一緒に活動したり学んだりしながら、自分の生活をふりかえり、学校をより楽しい場所にすることができるようにしていくことは、子どもたちが自分の生活を自分の力で豊かにしていくことにもなる。6年間の学校生活を送る子どもたちにとって、学校探検は、学校と最初にかかわり、そのかかわりを自分なりに広げ深めていくことのできる大切な単元である。学校を繰り返し探検することで、子どもたちは、学校の人・もの・ことに自然にかかわっていくことができる。そこで、活動に当たっては、何よりもまず探検で生まれたその子の驚き！や不思議？そして、楽しいな、おもしろいなど、それぞれの思いを大切にしていく。そうすることで、子どもたちは、活動の度に自分と学校とのかかわりを深め、より楽しい学校生活を送ることができるであろう。

(2) 学習のねらい

- 自分なりのめあてをもって、進んで探検することができるようにする。
- 探検して発見したことを自分なりに工夫して表現することができるようにする。
- 学校の施設や人々と自分とのかかわりに気づくことができるようにする。

(3) 活動計画と内容・・・全19時間

次頁の活動計画において、第2次～第4次は、探検とミニ発表会を活動のひとつとまりとして繰り返し行っていく。本稿では、この部分を中心に述べていく。



(4) 活動の概要

<第1次 導入 1時間> 学校って、どんなところ?

入学時の1年生は、たくさんの友達や大きな学校に、戸惑いながらも期待を膨らませている。そこで、この時期に、みんなで学校を探検することにした。全員での校内めぐりである。子どもたちは、あちらこちらを興味深げに見ながらも、前を歩く友達と離れては迷子になってはいけなと、列から決して離れない。教室に戻って、「すごく大きい。」「お兄ちゃんやお姉ちゃんが、何かのお勉強をしていた。」「にこにこ笑ってくれたよ。」などと口々に言い合っていた。学校は、なんだか楽しくておもしろい所らしいと、感じたようである。

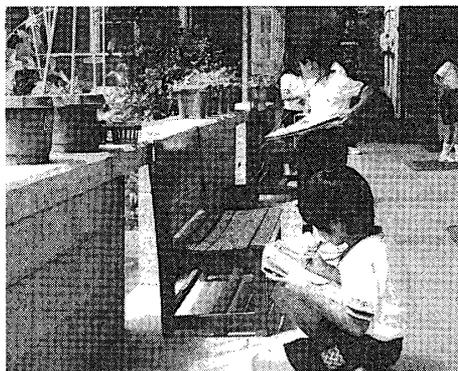
<第2次 6時間> 学校探検でござ〜る 春・夏の巻

「また行きたい。」と子どもたちは、意欲満々である。しかし、すぐには出かけなかった。それは、子どもたちが、自分なりに学校とのかかわりを深めるために、各自で探検を進めていくようにしたいと考えていたからである。そこで、縦割り掃除で各自の掃除場所に行けるようになった頃、探検を開始した。静かに何でも秘密を見つけられる忍者のように、子どもたちの決めた合い言葉は「お・は・し」となった。押さない・走らない・しゃべらないに加えて、おもしろいこと・はっけんしよう・知らないことをしらべようという意味である。

どの子も、目を輝かせて探検に出かけたが、初めて自分一人で出かけるので、みんな同じ方向に出かけ、友達と同じものを見つけて共に喜び合っていた。この時期の子どもの姿としては、当然のことである。ここでは、自分が決めて自分がそこを探検したのだという満足感を大切にしたい。

～各自の活動がかかわり合う手立て～

探検後、発見したことをそれぞれ簡単な絵や文にかきとめていき、各自の発見を伝え合う①ミニ発表会「大発見でござ〜る」を行った。ここでは、自分が不思議に感じたことを、友達もまた不思議に感じていることを知ったり、自分が発見していないことを友達から教えてもらったりすることができる。発表会は、共感し合ったり情報交換をし合ったりしながら、各自の探検活動を認め合い、ふりかえり、次の活動へのめあてをもつ場なのである。友達の発見に「同じです。」と喜び合いながら、次第に、友達とは違う自分だけの発見をするために、集団から離れて一人でも探検する姿が見られるようになってきた。



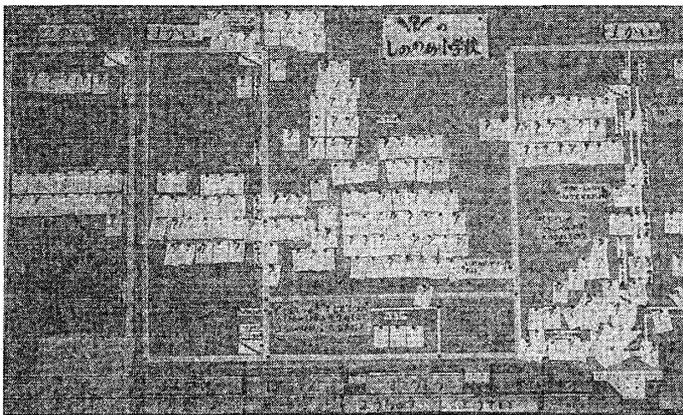
<はっけん!?!>

<第3次 6時間> 学校探検でござ～る 秋の巻

～さらにかかわり合うための3つの手立て～

そうじで見つけた木の葉や通学路で拾ったどんぐりなど、教室にさまざまな秋が集まるにつれ、「中庭はどうなってる?」「渡り廊下の様子が変わったよ。」と、帰りの会でのミニ情報交換が活発となった。そして、秋の深まった11月に算数科「がっこうをしろう」の学習を行った。保健室は1つで1階にある。なぜ1つで1階なの。と学校の施設の数やそのわけについての関心が生まれてきた。そこで、すぐに探検に出かけることにした。ここで、「夏の探検をまとめた紙をどうするの。」という声が出たので、「これからは、みんなのたんけんがいつでも分かるようにしよう。」と②常掲地図③発見ミニカード④教室に見立てた発見を入れる箱を使うことを提案した。各自の探検がさらに絡み合いかわり合えるように、また、少しずつ地図に親しむ機会をもてるようにと考えたからである。

<③常掲地図>



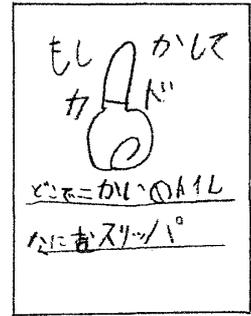
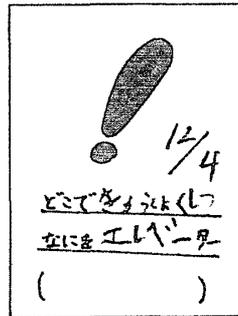
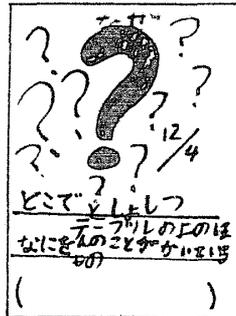
校舎の枠組みだけの地図に、子どもたちと相談しながら、教室名を書き加えていった。

この地図に、季節ごとに色分けした子どもたちの発見ミニカード③を重ねて貼っていくと、休憩時間にじっと見入る姿が見られた。

大発見の話し合い後に残った共通する?も書き加え、子どもたちが意識して次の活動につなげていけるようにしていった。

<③発見ミニカード>

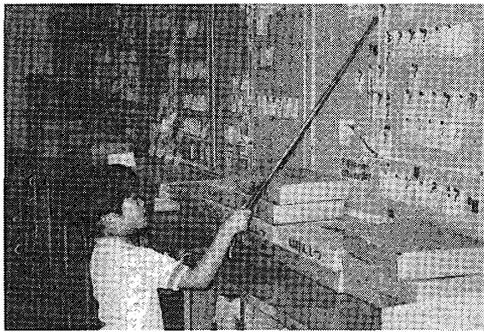
発見カードは最初「?」「!」の2種類を準備していた。すると、自分の発見に合わせて、「何も書いてないカードを。」という要求が出てきた。そして、分かったよ。おもしろい。役立つな。などと、自分の発見に合わせたカードが生まれてきた。



④教室の箱は、常掲地図の下に置き、いつでも友達の発見に触れることができるようにしていった。子どもたちは、箱を通して「給食室の発見が多いね。」「ここは、まだ誰も行ってない。今度行ってみよう。」と友達の発見を次の探検場所の参考にしたり、「この(地図の)カードの発見は、どんなのかな。」と箱の中の詳しい発見を知ろうとしたりしていた。探検の度に、子どもたちが箱で教室を構成していったので、「1-1の上は3-1...。」というふうに、各教室の配置を確かめることにもなった。足りない教室(箱)は、給食のメニューを見て「先生、箱をもらいに〇年〇組に行ってきます。」といつの間にか自分たちで出かけていくようになった。また、他学年から箱を届けてもらうときもあり、自分たちの活動を応援してもらっているという嬉しさも、味わうことができていた。

<第4次 4時間> 学校探検でござ～る 冬の巻

年が明けて、いよいよ冬の探検である。これまでの探検で、子どもたちは季節感を味わい、季節の変化を感じ取ることが自然にできるようになってきた。今回は、先に話し合っ



<消火栓は、ここに>

て探検を行うことにした。これまでの探検でも分からない、みんなで話し合っても解決しない？は、各階のスリッパの数と大きさが違うわけ、たくさんの書類やソファのある事務室の役目、階段の数、オリロー（避難器具）や消火栓の数と場所などであることを確かめ合った。子どもたちの関心が、見てもすぐには分からないもの（働き）に少しずつ移ってきていることが分かる。探検に入り、子どもたちは、養護学級のお餅つきや氷の張った中庭の池など、真冬ならではの発見を楽しみながら、残った？解決に向けて、ここに行けば教えてもらえるはずだと自分が見通しをもった場所に出かけていった。大発見の発表では、常掲地図を使って位置を示しながら、オリローや消火栓、非常ベルなどの数を確かめ合った。位置づけるとき、「どの階も、同じような場所にあるね。」という声が出ていた。

教室と離れている事務室は、「わたしたちが上手に勉強するためにあり、先生方は書類やパソコンでその仕事をしている。」ことが分かったが、まだ自分の目で確かめたいと、事務室への興味は尽きないようである。

きょう、学校たんけんにいきました。じむしつについて、いちばんおくのへやにしてみると、おもしろいでんわがありました。たいいくかんやとしょしつ、コンピュータールームなど、たくさんのきょうしつの名まえがかいてありました。そして、ランプもついていました。じむしつの先生にきいてみると、「ランプが赤くひかったきょうしつへでんわをして、本とうに火じなのか、たしかめるためのでんわです。」と、おしえてくださいました。火じになったとき、このでんわのおかげで、ぼくたちが、すぐにひなん出るんだな、とおもいました。
(1月のあのね より)

事務室と自分たちの学校生活との目に見えなかった結びつきは、みんなの大発見となった。

3 ふりかえって

子どもが学校とのかかわりをどのように深め、活動や意欲を高めることができたのか、本実践を2つの手立てを基にふりかえりたい。

<1年間を通して活動できる単元計画>

A児：(前略) なつにいたはずのアメンボが、いませんでした。いけをそうじする人はいるのかなあとおもいました。
(11月のあのねより)

B児：きょうのたんけんは、うまくいったよ。それは、先生にはじめてきいたから。
(2月のふりかえりカードより)

A児は、秋の探検で季節ごとに変わる池の変化に注目し、冬の探検で凍った池に出かけ、鯉が見えなくなったことに驚いた。事務室の先生に冬眠していることを聞き、春になって鯉がどうなるのか春の探検を楽しみにしている。B児は、みんなの探検発表から、分からないことは先生や上級生に聞けばいいんだということが分かっていたが、いつも友達と一緒に、2月になって初めて一人で先生に聞くことができた。分かっていることが本当に自分でできるようになって、大きな自信になったようである。

以上のように、年間を通しての探検は、ここで気づかせよう、上手に探検させよう

せることなく、子どもの学校での活動や状況に合わせて、ゆったりと探検を続けることができる。また、他教科の単元や日常の春見つけなどの活動と関連づけながら、意欲を持続させることができる。そして、身近な学校内の自然に触れ、季節の変化を感じ取りやすい。そのため、繰り返し活動を続けながら自分で探検する方法を身につけたり、季節や前回と比較して探検しようとしたり、自分でできるんだという実感を味わったりすることができ、次の活動への意欲につなげることができた。

<各自の活動がかかわり合う場の設定>

① 大発見でござ～る（探検後のミニ発表）

？や！などの各自の発見や探検の仕方を伝え合うために、探検後に設けたミニ発表会の場である。ここでのいいところ見つけから、上手に？を解決している子のお話の聞き方や考え方などを知り、自分の探検に取り入れる一方、友達に認められた子は、自分の探検に自信をもち、ますます意欲を高めていくことができていた。特に、どのように、何を探検したらよいか迷う子どもには、次の活動に向けての指針ともなっていた。

活発に質問や意見が出るのが大切なので、発見や自分の思いが自分の選んだ紙にメモ程度にでも表現されていればよいと考えて、進めていった。発言しにくい子でも、今日の自分の探検をまとめた紙が手元があれば、話し合いに加わりやすくなる。活発な話し合いからは、みんなで一緒に解決したいおもしろい？も生まれてくる。子どもたちが、消火栓や非常ベルなどに興味を引かれたのは、避難器具オリローが1階にあるという友達の発見がきっかけである。「1階ならアガローじゃないんですか。どこへ上がるんですか。」という質問に「本当だ。」と爆笑が起こった。だれも答えることができず、みんなで1階を確かめたところ、1階にあったのは、オリローではなく消火栓であった。ここから、消火栓や非常ベルの場所と数へと活動が広がり、事務室の発見と絡まって、自分たちの命を守る仕組みがあることに気づくようになったのである。

② 常掲地図・発見ミニカード・教室に見立てた箱

年間を通して行う各自の探検を蓄積し、各自の探検がさらに絡み合いかわり合って、ひとつの発見をみんなのものとするために考えた手立てである。活動の概要で述べたように、箱は、いつでも自由に発見を入れたり出したりして、お互いがかわり合う場となり、教室の位置を考える学校の一部ともなっていた。常掲地図は、ミニカードを貼る時に「そこ、ここ、？」から始まって「右、左」となり、冬の探検では「3階の階段のそばの・・・」と自分から説明に使うようになった。箱と共に、少しずつ子どもの成長に合わせて、空間意識を育てることにつながっていると考えられる。また、常掲地図に発見ミニカードを貼ることで、一目で友達の発見を知ることができた。そして、その場を指し示しながらお互いの探検を伝え合う姿が見られるようになった。ミニカードは、小さなものだけに、子どもたちの書ききれない思いが凝縮して表現されていた。「へんだな・すごい・もしかして・ええー・きをつけよう」などなど、？や！ではなくくれない、1年生の子どもたちの生き生きとした発見や考えを伝えてくれるものとなった。

4 おわりに

子どもたちは、学校探検を通して、繰り返し場所にかかわり、？解決のために人とかわり、かわることを楽しむようになった。そして、もっといろいろな所を探検したい、続けて？を解決していきたいと、活動に広がりや深まりが見えるようになってきた。全ての子どもの活動を1回の探検で把握することは難しい。しかし、これからも、子どもたちの表情や活動の様子、カードや日常の活動などからの確に子どもたちをみとり、子どもたちが、飽くことなく対象に働きかけることができるような手立てを探していきたい。